

## 目 次

### ■特集

開館後の1年を振り返って～防府市青少年科学館～／防府市青少年科学館・山中 敦子 ..... 2

『食の展示』をめぐるアウトリーチとワークシート活用の試み／まちづくりラボ・嵯峨 創平 ..... 6

仙台文学館／（株）展示学研究所・安藤淳一 ..... 9

■ミュージアムのエントルブルナ三重県立みえこどもの城業務課長補佐 河原 孝氏／ミュージアム工学研究所・樹井 喜孝 12

■研究部会活動報告 ..... 14

理論構築研究部会 第1回研究会「美術館のコレクションにかかる現代的な課題」／千葉県立現代産業科学館・高安 礼士

ミュージアム文化研究部会 第1回研究会「生涯学習とミュージアム」／筑波技術短期大学副学長・沖吉 和祐

■ミュージアム・トレンド 時の話題 ..... 17

『博物館基準に関する基礎研究：イギリスにおける博物館登録制度』／竹内 有理

昭和シェル石油「シェルミュージアム」について／（株）小林工芸社・弓場 哲雄

東北からの発信をめざして 10月9日（土）東北歴史博物館オープン／東北歴史博物館・佐藤 琴

■新刊紹介 「ミュージアム集客・経営戦略」／ミュージアム工学研究所・樹井 喜孝 ..... 21

■掲示板 ..... 22

「企業ミュージアム」を改訂出版

「志（私）塾サミット」

■インフォメーション ..... 22

# 開館後の1年を振り返って～防府市青少年科学館～

中山 敦子（やまなか あつこ）  
防府市青少年科学館

平成10年4月29日に開館した防府市青少年科学館は、山口県防府市にある、地域型の科学館である。今年2度目の夏を迎えた防府市青少年科学館がこれまでに開催した、いくつかのイベントに対する市民のかたがたの反応を通して、地方のまちのちいさな科学館が地域から期待されている役割について考察し、さらに今後の方向性について提案を行う。

## 1.はじめに

防府市青少年科学館は、平成8年、防府市政60周年記念事業として企画された町づくりの一環として、その建設がスタートした。科学館とともに、文化交流会館、歴史博物館の建設が予定されており、市の生涯学習課にそれらの準備室が設置された。科学館は、「歴史と未来の見える街」という防府市のイメージアップスローガンを具現化するための「未来ゾーン」として位置づけられ、設立趣旨の中では「人々が科学に親しみを持って接することができ、青少年に未来を感じさせることのできる生涯学習施設」と性格付けされている。江戸時代に赤穂に次いで塩造りの盛んであった日照率の高い土地柄より、科学館のテーマは「太陽のエネルギー」とされた。館の屋上には6連装の太陽望遠鏡を納めたドームが設置されており、太陽望遠鏡で観測した太陽像が、展示室の大スクリーンやモニタで常設展示として来館者に提供されている。プラネタリウムは併設されていない。

現在の防府市は、人口は県下4番目の約12万人（平成10年度）。市の臨海部の旧塩田跡地に、マツダ、ブリヂストン、鐘紡、協和発酵等の大企業が進出しており、西の奈良とも呼ばれる歴史遺産に恵まれた観光地的側面ももつとはいえ、工業都市としての性格が強い。JR防府駅から徒歩10分というロケーションではあるものの、車社会であるためか市内のバスの便が少なく、館周辺の数校を除き小学校の

生徒が子供たちだけで気軽に訪れるることは難しいという現実がある。このことは、来館者の89%が自家用車での来館であるという後述のアンケート結果からもうかがえる。

前述の通り設立主体は防府市であるが、館の経営は、平成10年4月1日付の発足とともに財防府市文化振興財團へと移行し、現在、館長を筆頭に、パート・常勤非常勤あわせて15名のスタッフが実務を行っている。

## 2.問題提起

町づくりの一環として建設された科学館であるが、事前の公式ビジタリサーチによるデータのない状態でのスタートであった。そこで、まずは科学館に対する市民のニーズをリサーチしたいと考えたが、すでに開館し運営を始めている状態で予算や人の都合がつかないこともあり、さまざまな企画を実践しつつ、各企画に対する市民のかたがたの反応から科学館に求められている役割を考察するという姿勢をとった。今回ここに発表するのがその結果である。

以下では、科学館が開館してから現在までの1年3ヵ月のあいだに行ったさまざまな企画から、規模の大きいもののうち性質の異なる3つを例として取り上げ、参加者の反応（主にアンケート結果）を紹介し、当館に期待されている役割を考察する。さらには、その考察をふまえて利用者満足のための提案を行ない、今後の科学館の企画運営について

表1

1. 講演会	「ピーター博士の 南極の冒險」 開催期間 2日 参加者 300名 対象 小学校高学年以上～一般（定員 各日150名） 内容 NASAの現役研究者による研究現場と研究内容の紹介など。講演会形式の普及活動。
2. 巡回展の受け入れによる特別展	「色と光! 地球のメッセージ」展 開催期間 37日 来館者 2989名 対象 特定せず（小学校高学年以上を想定？） 内容 見て読んで学ぶタイプの、展示型の巡回展。
3. 科学の祭典	「おもしろサイエンス in ソラール '99」 開催期間 30日 来館者 13609人 対象 特定せず（結果的には、工作メニューの内容は、小学校低学年を想定したものが大多数となつた） 内容 短時間でできる工作や実験を参加者に体験させるタイプのイベント。一日に6ブースの実験工作を設け、2日に一度内容を変更、計90種類の実験工作を供した。

て議論したい。地方の地域型科学館の一例として、ご参考いただきたい。

取り上げる企画は以下の3つ（開催順）である。

1. 科学講演会
2. 巡回展受け入れによる特別展
3. 科学の祭典

それぞれ、企画の規模、形式、対象などが異なる（詳細は表1）。共通しているのは広報の手段である。広報の規模、期間等が多少異なるが、今回は、広報の規模の違いによっては参加者の客層は変化しないと考えている。以下、各企画の参加者の意識を、主にアンケート調査の結果をもとに考察する。（アンケート結果の詳細については省略させていただく）



1の科学講演会は、現役研究者が直接参加者に語りかけることを売りにした企画である。2日間の開催であったが、両日とも定員150名を超える参加があった（予約状況は、1日目100%、2日目65%）。募集は、小学生以上一般までという枠で行ったが、参加者の内訳は、小学生14%、中学生32%、高校生3%、一般51%（中学生以下の子供連れでない一般は全体の34%）、アンケート回収率は28%であった。防府市外からの参加は27%。他の企画と比較して市内からの参加の多さが浮き彫りになった。講演会の開催は、ポスター、チラシを見て知ったという回答が28%、防府市の広報で知ったという回答が25%であった。その他の回答29%のなかには学校で知ったという回答も多くあった。

来館者の方々からは、研究者自身が、南極での研究生活や研究内容について分かりやすい言葉で来館者に語りかけたことと、隕石の実物などを用い参加者に実際に触れて頂いたことに評価を頂いた。さらに、将来講師として科学館に呼んでほしい人としては、圧倒的に向井千秋さんを始め宇宙飛行士の方々の名前が挙がっており、特に一般層の参加者の、第一線の現場で働く人々に対する関心の高さを読み取ることができた。

2の特別展は、37日間の開催期間中2989名の来館者があった。対象は限定せず、来館者の内訳は、小学生51%、中学生2%、高校生1%、一般42%。ただし、一般42%のほとんどが子供の保護者としての来館と考えられる。防府市内からの来館が55%、市外からの来館が45%であり、1の講演会と比較して有意に市内からの来館が少ない。はじめての来館者が45%で、過半数は以前にも科学館を訪れたことがあると回答しており、3%が平均月一回以上科学館に訪れるリピーターである。館に来て始めて特別展の開催を知ったという36%を除くと、口コミで開催を知ったという

ケースが21%と一番多く、ついでチラシ・ポスターを見た（17%）、学校で知った（14%）、市広報で知った（10%）の順となっている。

3の科学の祭典は、夏休み期間の開催ということもあり、30日間の開催に1万3千名を超す来館者があった。聞き取りにてアンケート調査を行ない、106件の回答を頂いた。

回答者の内訳は、小学校低学年10%、小学校高学年23%、中学・高校生19%、一般49%であった。うち、家族連れての来館は88%（一般での来館は100%子供を含む家族連れてである）、友達同志での来館が12%（ただしこの回答も、ほとんどが母親が友達同志でお互いに子供を連れて来館するパターンである）。家族での来館の場合、来館を提案したのは母親である場合が最も多く、家族連れの55%を占め、父親による提案は20%、あわせて親の提案による来館が75%を占める。とはいっても、来館を提案した親の半数が、理科がきらいもしくは科学に関心がないと答えている。このことを反映してか、親側からは科学教室などで取り上げてほしいテーマなどの要望はとくに無く、科学館への要望としては、保護者が参加しなくてもよいイベントを望む声と、親子でできる科学教室などのイベントを望む声が同時に上がっている。

一方、子供の側は、小学校低学年、高学年、中学高校と理科嫌いの割合が高まるのは理数調査報告書（平成7年度研究成果及び調査集計結果/文部省教育研究所）と同じ傾向を示し、総合して73%の子供が理科が好きと答えている。サンプル数の少なさから定量的な比較は難しいが、平成7年度の文部省国立教育研究所の調査結果と比較して有意な差が認められないと思われることから、とくに理科好きの子供が集まっているわけでもないようである。科学館で取り上げてほしいテーマは小学生ではとくに無く、中高生になると天文・宇宙、昆虫、恐竜などさまざまなテーマを挙げるようになる。開催を知ったのは口コミでが多く、次いでポスターとチラシが多い。



### 3. 考 察

以上のアンケート結果と、他の企画などの参加者の傾向を考えると、企画展・特別展への参加は、圧倒的に親子連れ、とくに小学生の子供を連れた母親層が多い。原因是交



通事情と、子供を安心して遊ばせることのできる施設が地域に少ないということにありそうである。ほとんどが車での来館で、親が子を誘って来館する場合が多い。彼らは、科学館のテーマや「科学」にひかれて来館しているわけではないので、とくに科学館にテーマ性や専門性を望んでいない。事務室にてお客様からの電話に応対するのも学芸員の仕事であるが、館の場所や休館日を尋ねる電話に混じって、「子供だけを（科学館に）置いていきたいがかまわないか」という母親の声をよく聞く。また、アンケートでも「子供を安心して遊ばせることができる施設ができると嬉しい」との声が聞かれる。家族・親子でより快適に遊ぶことができる、または子供をより安心して遊ばせることができる施設であってほしいという要望が伝わってくる。一方で、「電気をやってほしい」「実験をやってほしい」「各学年に合わせた内容の科学教室をやってほしい」など、学校のカリキュラムとの連携を望む親の声もよく聞かれる。安心と遊びに学習の要素も加われば親としてはなお都合がいいということであろう。子供の側には、学校の延長や理科の勉強で科学館に来ているという意識はなく、子供自身が「つまらない」「分からぬ」と感じたものは、科学教室だろうと展示物だろうと見向きもされない。とはいえ、傍らの親の態度が、子供の感じ方に大きく影響している場合は多い。利用者満足の追求のためには、今後、特に理科や科学に興味があるわけない保護者の層に、よりアピールする企画立案が望まれる。具体的には、「親子のための」企画や、実験工作的安全性や対象学年を明確にした企画と広報が望まれる。

一方で、科学講演会などには、自分自身の興味を動機とする一般的な参加者も存在する。彼らは、現役の研究者による最先端の科学解説や、著名人による講演などの特別企画には参加するものの、科学教室やセミナーなどの地味な教室活動にはあまりあらわれない。これは、ひとつには、当館が科学教室の対象を「小学生以上一般まで」「中学生以上一般まで」とあいまいにし、一般対象と銘打った企画を行っていないことに原因があると思われる。当館がこの1年3ヵ月のうちに開催した企画のうち、高校生以上一般向けと明確に対象を定めた企画はただ一件の講演会のみである。また、もう一つに、科学館で提供できる科学レベルが、科学に興味のある一般層が要求するレベルに達していないと思われているのではないか、ということがある。科学館の学芸員が研究者としての面を持つことは、一般にはほとんど認識されていない。これは、今まで行なってきた広報の指向性に原因があると思われる。すなわち、一つは科学館が明確にテーマ性を全面に打ち出してこなかったこと（「太陽」に関する企画は科学教室1件のみであった）、もうひとつは、子供から一般まで幅広い層を対象としたため、結果的にほとんど子供のレベルに合わせた広報となった、つまりは子供のための施設であることを強調してきたことである。

科学に関する普及活動は、科学技術庁の科学技術理解増進室などでもほとんどすべてが青少年を対象としている。いわゆる「理科離れ」への対応として青少年育成の重要性はもちろんだが、科学は子供のもの、という日本の傾向がますます促進されるように思われる。また、より高レベル

の理解を求め、かつ大学の研究室などの研究現場からは遠ざけられている高校生の層を、一層科学館から遠ざけることになってはいないかとも思う。青少年に働きかけるとともに、一般層への普及もはかっていく必要があると考える。

山口県は県全体としては、年少人口割合（15歳未満を指す）が少なく全国47都道府県のうち41位、平均年齢は高く全国4位、人口増加率は全国44位の低さ、社会移動全国45位の低さという、典型的高齢化、過疎化の傾向を示している。来館者層としては今のところ明確に現れてはいないが、さまざまな科学館や博物館で一般層の来館者が増加していることをおもえば（たとえば滋賀県立琵琶湖博物館「（滋賀県立琵琶湖博物館の入館者のうち）小・中学生が全体に占める割合は18.7%、高校・大学生は少なくて3.7%、大半が一般客で77.6%。」Kyoto Shimbun 1997.12.17 他に全国科学博物館協議会等の発表を参照）、山口県にも科学に興味を持つ一般の、潜在的来館者の層は存在すると考えてよいであろう。くわえて、市内に4年制大学ではなく、学生数400人強の山口短期大学があるのみであり、理科系の生涯学習を行うことが可能な場は極端に少ない。今後、一般のかたがたが望んでいると思われるレベルを満足する企画を行い、潜在しているニーズを掘り起こしていくことも重要であると思う。

親をはじめ、身近に科学を文化の一つとして受け入れている大人がいてこそ、子供の芽が摘まれずに伸ばされる。このことは、科学技術庁の「研究者の原体験に関する調査」の結果によても明らかとなっている。当館の場合、常設展・特別展への来館は親子づれが圧倒的に多いことは前に述べた通りである。科学教室やセミナー、講演会など、館にて大人を対象とした普及活動を活発に行うことによって、館に遊びに訪れる親子に、大人自身が科学を趣味として、生涯学習として楽しんでいる姿を見せることができると思う。

#### 4.まとめ

映画や音楽などさまざまな趣味や娯楽には、創り手と受け手がいる。幅広い受け手の層があつて始めて、優秀な創り手たちが生まれてくるのではないだろうか。家庭にパソコンが普及しインターネット人口は増えつづけている。ネット上では家庭で遊べるプラネタリウムソフトや、多体問題やフラクタルをビジュアルに扱ったスクリーンセーバーなどが簡単に手に入るし、CD-ROM等を媒体とした恐竜図鑑や天体画像集などもある。勿論、これらを楽しみ、遊ぶことは「娯楽」であり、「科学する」こととは異なるが、音楽好きがCDを聴き、映画好きがビデオを鑑賞することと同じことといえるのではないか。身近に自然観察の場はなくなりつつあるが、一方で受け身で手軽に科学に触れられるソフトや、目で見て遊べるシミュレーションソフトなどが今後増加していくとすれば、意識せずに科学を遊びの道具とする受け手の層の拡大が期待される。科学館としては、科学が趣味や娯楽の一つとして社会に受け入れられるように働きかけると同時に、受け手がより高度なものや「科学してみたい」ことを望んだときにその機会を提供するためのスタッフとツールを持ち、時には優秀な創り手と

作品が直接受け手に触れるような機会を設ける、このような施設を目指したいと私は考える。

具体的には、今後は科学講演会の規模の小さいものを回数を多くして行う予定である。県内の大学や企業等から現役の研究者や大学院生などを講師としてお呼びし、研究について一般向けに語っていただく機会を設けたいと考えている。防府市に潜在している一般の方々のニーズを知ることも目的の一つであるが、これをはじめの一歩として、大人が科学を楽しんでいる姿を、保護者の方々や子供たちに見せていただきたいと思う。

若輩に実践の場を与えて下さった佐伯陽一館長、発表の場を与えて下さったJMMAのスタッフの方に、この場を借りて御礼申し上げます。

#### 参考文献・参考資料

廣瀬隆人「学校教育と「融合」する博物館活動」国立教育会館社会教育研修所季刊ミュージアム・データ1996.12 Number35

山本恒夫1996「学社融合のシステム化」『社会教育』第51巻第2号

馬渕浩一著「21世紀の科学館像」 ミュージアム出版

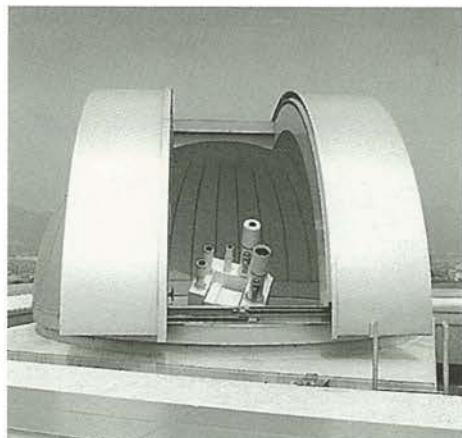
大堀 哲、小林達雄、端 信行、諸岡博熊 編「ミュージアム・マネジメント」東京堂出版

R. ダンバー著「科学がきらわれる理由」青土社

科学技術振興調整費ニュース「次代の科学技術を担う青少年の創造性を育成するための方策のあり方に関する調査」第169号 科学技術庁

科学技術振興調整費ニュース「次代の科学技術を担う青少年の創造性を育成するための方策のあり方に関する調査」第170号 科学技術庁

「理解増進に関する懇談会報告書」平成10年6月 宇宙開発委員会



## 防府市青少年科学館

HOHU SCIENCE MUSEUM

開館時間：午前9時30分～午後5時

(入館は午後4時30分まで)

休館日：月曜日

(国民の祝日に関する法律に規定する休日にあたるときは、その翌日)

12月29日～1月3日

※その他、臨時休館があります。

観覧料：子供（小・中学生）

個人200円、団体（20人以上）100円

大人（高校生以上）

個人300円、団体（20人以上）200円

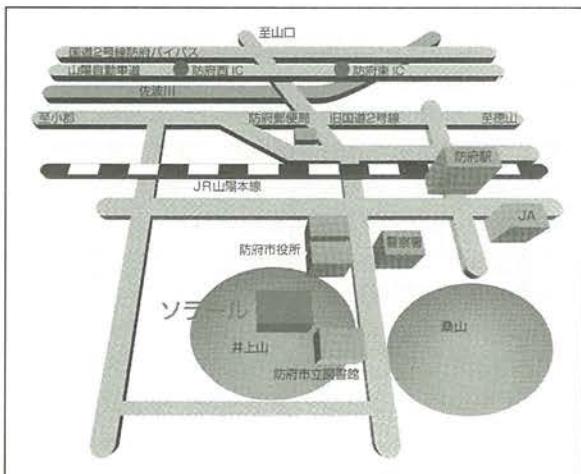
※団体利用については、予めご連絡ください。

#### 交通ご案内

●JR山陽本線防府駅よりバス5分、

防府市役所前下車徒歩5分

●山陽自動車道防府西・東ICより車で10分

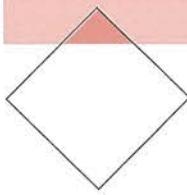


〒747-0809 山口県防府市寿町6-41

TEL (0835) 26-5050

FAX (0835) 23-6855

<http://www.urban.ne.jp/home/solar/>



## 『食の展示』をめぐるアウトリーチとワークシート活用の試み

～文京区消費生活センター夏の企画展をめぐる実践報告と考察

嵯峨 創平（さが そうへい）  
まちづくりラボ代表

### はじめに

毎年夏休みになると、子ども向けの体験学習の講座・教室・イベント等が博物館を始め各地のフィールドで実施される。筆者は今年、文京区消費生活センターの依頼で、区内の小学生を対象に、施設内の展示と関連づけた消費者教育プログラム「夏休みこども講座」の企画運営を依頼された。展示と教育プログラムの連携に関心を持つ者として、この夏のささやかな試みを手掛かりに、2回のワークショップ形式の講座内容を紹介するとともに、アウトリーチやワークシートの設計と活用について筆者なりの考えを述べてみたい。

### 1. 文京区消費生活センター「夏の企画展」と「夏休みこども講座」

地下鉄丸の内線の後楽園駅を出ると、読売ジャイアンツの本拠地・東京ドームと線路をはさんで文京区シビックセンター（27階）が並び聳えている。区役所や文化ホールを核とする複合ビルで、文京区消費生活センターはこの地下2階にある。でも、都会的な駅前を抜けて少し歩けば、古い商店街が連なり裏町には事務所や住宅がひしめく庶民的な匂いのする土地柄も感じられる。

同センターは毎年夏の恒例として、消費者教育を目的とする企画展示と消費者研修会を実施している。本来両者は別個の事業で、企画展示は区内の主婦層を中心とする成人向けに企画制作され、研修会は夏休み中の小中学生向け学習機会として提供されるものだ。しかし今回は、所長らの希望により、展示企画の途中段階から子ども向け講座を連動させた教育プログラムが企図され、展示に使用されるテキストや素材をにらみながら、筆者が制作会社（（有）イリュージョンミル）や事業担当者と共に教育プログラムの設計を行うことができた。この段階で、担当者から特に地元の食材や産業と結び付けたプログラム展開が希望され、筆者は子ども達の体験／理解／表現のスパイラルを無理なく構築する手法として、実際の町へ出て商店や商品を調べ、それを互いに伝え合う活動（アウトリーチを核としたテーマ学習ワークショップ）と、展示を子ども達の視点から読み解き・表現し直す活動（ワークシートを活用した展示づくりワークショップ）を提案した。

展示テーマは『いのち・自然・くらし～食を知る・選ぶ～』であった。展示期間は99年7月22日～9月10日まで。展示内容は、導入として【日常生活の中の食】（今日は何を食べた？）として様々な食べ物の写真…実はこの中に文京区の町並みや商店も入れ込まれている。続いて8つのテーマ展示、【食と健康】（夏野菜を食べて元気に過ごそう！）、【保存料、放射線照射、ポストハーベスト等】（カビないのは何故？）、【食

品添加物、遺伝子組み替え等】（同じようで同じじゃない）、【食と地球環境】（おいしさはつながっている）、【輸入食品】（どこから来たの？）、【無農薬有機農法、エコクッキング等】（おいしいガーデニング）、【生産者と消費者の信頼関係づくり】（つくる人とつながろう！）、【ダイオキシン、環境ホルモン、リサイクル】（ごみはいらない！）と展開する。私たちの日常の食卓の裏側にある様々な食の問題背景に気づかせるとともに、最後まで答えを出してしまわない（考え方の展示）と、問題の深刻さばかりに縛られて食の楽しさや可能性を見失わないよう（前向きな問題解決提案）が特徴であった。この展示フロアと隣接の講座室そして町の空間を使って、ワークショップ形式による講座を7月23日（金）と29日（木）各回とも午後1:30～4:30の2回にわたって実施した。

### 2. アウトリーチ・プログラムの実験としての「町のお豆腐屋さん探検」

第1回のテーマは「「おとうふ」から文京区の暮らしが見えてくる～町のお豆腐屋さんの秘密をみんなで徹底解剖！」。子ども達の日常の生活空間である文京区の町、そしてごく当たり前の日本人の食材である豆腐へ新たな注意を向け、体験と発見を共有することによって、今後のプログラム展開の土台を作ることをねらいとして構成した。

夏休みに入ってすぐのとても暑い金曜の午後、会場に集まった小学校3年生～6年生の15人の子ども達。皆ちょっと緊張気味だ。初めに、講師（筆者のこと）の自己紹介と今回の2回にわたる「おとうふプログラム」の見取り図を話した。特に今日は「実際に豆腐屋さんに出掛け、その秘密を皆で探すこと」がテーマであること、その為には皆で少し準備と作戦会議をしなければならないことを話して次の場面に入る。食に関するゲームやクイズをしながら子ども達が少しほぐれた後、グループに分かけて子ども達に『指令書』を手渡す。中には①とうふの作り方、②とうふの行き先、③とうふの歴史、④とうふの水の秘密、⑤とうふの味を探れ」と書いてある。各グループ内で指令の分担を決める簡単な作戦会議をしたら出発だ。この日のハイ

ライトは何と言っても地元商店組合の協力によるお豆腐屋さん見学とご主人と子ども達との質疑だ。ここに時間を割くために前半はやや短縮した展開で進めた。

歩いて15分ほどで目指す「和賀喜家」



さんに到着。狭い店内に同行の大人を含めて20人以上が入るともう満員状態だ。でもご主任はニコニコしながら豆腐製造用機械の仕組み、原料となる大豆や井戸水のこと、中国から伝来した豆腐の歴史等について語ってくれる。そしてハイライトは豆乳にぎりを打って豆腐を凝結させる場面!ここだけは職人の熟練が必要とされる瞬間だけに子ども達も自然と固唾を飲む



…。この後、子ども達の「取材」が始まった。最初はおず

おずと、慣れてくるとしつこい位に質問が出てくる。すし詰め状態で中には疲れた子もいたようだが、冷たい井戸水と水道水の味を飲み比べて少し精気を取り戻したり…、名残を惜しみながら1時間のプログラムを終え

て会場へ戻った。

会場に戻って小休止の後、出来たての豆腐の試食会を行った。ビニールで包装された四角い豆腐に慣れている子ども達は、まだ少し温かい「おぼろ」状の豆腐を神妙な顔で食べている。最後に30分間のまとめを行った。各グループで『指令書』にあった項目を参考に、分かったこと・驚いたことを紙に書き出していく。その次に、「和賀喜家とうふ店の秘密」と書いた1枚の模造紙に各グループで分かったことを書いていった。豆腐の原料はほとんどアメリカから輸入されていること、豆腐の味を決める水が水道水に代わってきたこと、豆腐の流通と保存料の関係など…、新事実を皆しっかりと心に刻んだ。

第2回の講座に向けて約1週間のインターバルがあったことから、子ども達にちょっとした宿題を出した。「これから1週間で家で買うお豆腐のラベルを持って来て。そして買ったお店や食べた料理法をメモして来て」というものだ。これが次回のネタに繋がる。

### 3. ワークシートによる展示の読み解き・再構成の試みとしての「展示づくりワークシヨップ」

第2回は「「おとうふ」の中に世界の食の問題が見えてくる~消費生活センターの「豆腐展示」をみんなで徹底改造!」というやや過激なタイトルで始まった。初回で学習した豆腐の原料・製法・流通の実態に深い影響を与えていく「食」や「農」に関わる世界的な動向について、展示の中から子ども達自身の目で発見し再構成して表現してもらうことをねらったものである。1週間ぶりにやって来た子ど



も達は、皆リラックスしている。はじまりは、前回の活動をスライド撮影したものを紙芝居風に上映してのふりかえり。次に、今日のプログラムの仕掛けその1「食品表示」に関するクイズを行った。国内で販売されている全ての加工食品には、必ず何らかの食品表示が付いている。おなじみのJASマーク(農林省)や厚生省が定める義務表示から、各食品業界やメーカーが独自に表示する内容まで様々だ。これらをカルタ形式で読み札・取り札に分けてゲーム仕立てで楽しんだ。次に、宿題となっていた「豆腐のラベル」を皆で並べて貼り出した後、7種類の豆腐ラベルの中から「君が1枚選ぶとすればどれ? その理由は?」という質問で、ラベルに書かれた情報から商品の特徴と優劣を探り出してもらうプログラムを行った。最初は直観だけで選ぶ子もいたが、グループ毎に最もお勧めの一品を選ぶ段になると、喧々囂々の議論となつた。

子ども達のチームワークと表示に対する関心が高まってきたところで、いよいよ本題の「展示の読み解き」へと進んだ。仕掛けその2は「ワークシート」である。皆で展示のある空間へ移動した



後、「どうふの展示は何か所ある? いろいろな食品表示から何が分かるかな? 良く分からることは何だろう?」という内容の自記入式ワークシートを配付した。実は、冒頭に書いた展示内容(導入と8つのテーマ)のあちこちに豆腐が登場する。それを捜し出して、文脈の中で読み取ることが求められる。また、豆腐に限らず、子ども達が日常的に口にしている菓子類・ジュース類・インスタント食品にも実際に様々な食品表示が付いている。それらの図案と意味内容に注意を向けてもらうためにオリエンテーリング風に展示パネルの迷路を旅してもらった訳だ。さらに「書かれていない情報」について考えてもらうことを意図して最後の質問を設定した。これはやや高度で持て余す子もいたが、約30分間で子ども達は、こちらの予想を超えて詳細に「豆腐情報」を見つけ出し(中には参考図書の中からも)、各種の表示の意味についても活発な意見を交わした。

第1回目のワークショップからここまで学習成果の総まとめとして、再びグループに戻って「展示づくり」に取り組んだ。とは言っても1時間余りという時間的制約があり、模造紙1枚を原則としてグループ毎に「おとうふ屋さんの秘密」「とうふの買い方・食べ方」「とうふの食品ラベルの秘密」のテーマを選んでまとめていった。この際、講師の方から注文をひとつ、「グループ内で相談してまとめるだけでなく、各テーマについて参加者全員(15人)から簡単なア



ンケートを取ってそれを展示に入れること」。これは子ども達が自らの興味でワークシートを再生産し、それを使ってさらに密なコミュニケーション網と情報創造が生まれることを意図して出したリクエストだ。



最初は企画の構成やアンケートの内容がまとまらずに動きが悪かった子ども達だが、各グループに入った職員スタッフの方々のサポートを得て進むべき筋道が見えてくると、がぜん動きが活発になった。紙面作りに凝る子、最後までアンケートを聞き回る子、遊んでる子…。

「とうふ」という視点にこだわった今回のプログラムでは、初回の実地調査での発見や驚きを土台に、第2回では、それをさらに広げる仕掛けとして食品表示や食の展示を素材として提示しワークシートを使った読み解きを行った。子ども達自身の中でこれらの体験がどのように繋がり、構成されていったかは定かではないが、一つ一つの体験に夢中になり、グループで協働するなかで、「とうふ」への理解と想像力は確実に広がっていったように見えた。とにかく「展示」を完成させて、皆で展示コーナーまで運んで空いた壁面へ貼りつけてしまった。子ども達が制作した展示は、このまま会期末まで他の展示と一緒に来館者に公開されることになるのだ。ちょっととした展示解説員きどりで各グループの発表が終わった後、締めくくりの挨拶をしてワークショップは終了した。子ども達は、豆腐屋さんの記憶、食品ラベルの秘密、友達との協力など様々な体験を胸に帰っていった。



#### 4. 展示と来館者とのインタラクティブに向けて

今回の講座企画では、「食」をテーマに展示情報と教育プログラムとのインタラクティブ(相互作用)を構造化する

とともに、展示情報を一つの刺激剤として参加者相互のインタラクティブを促進するための道具(ワークシート)と技法(プログラム)の実験を試みた。その企画と実施のプロセスを振り返ると、要点は次の4点にあったように思われる。

第1に、事業担当者および展示制作者と教育プログラム担当者との協同体制が早い段階でとれたこと。一つの展示を本来の大人向け以外に、子ども向けの学習素材として、さらに地域の食品事業者との連携のきっかけにも多面向に活用しようと意図したことが今回の重要なポイントである。

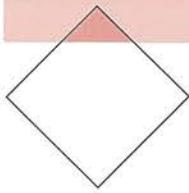
第2に、消費生活センターの展示空間に全ての人や情報を集めてくるのではなく、地域の人材や素材との連携を図ったことにより、教育プログラムの幅が大きく広がったこと。目立ちにくい施設立地や堅苦しい印象を与えがちな消費者教育というテーマを克服するためにも、施設の持つ資源を地域に向けて開いていくアトリーチが有効であろう。

第3に、展示内容と来館者(が展示を見る前に日常生活の中で抱いている「思い」)とを結び付けることが、両者のインタラクティブを発生させるために重要であると考える。展示情報は多角的な読み取りが可能な凝縮された素材であるが、来館者の関心のベクトルと展示が提供する情報のベクトルとが合致して、初めてコミュニケーションは成立する。その意味では、セルフガイド式のワークシート設計に際しても、単に展示が伝えたい情報を読ませる仕掛けだけでなく、来館者が自ら情報を操作する余白が重要だと思う。

最後に、展示と来館者との間に起こるコミュニケーションを促進する仕掛けに様々なバリエーションを持つことが大切だと考える。今回のワークショップのように間に促進者が介在する場合はその選択肢は非常に大きくなるが、そうでない場合でも、道具の設計や使い方、施設全体が何らかのキャンペーンを展開すること等によって、来館者の展示に対する「思い」や期待値は様々に変化し更新されることが期待できる。こうした「展示とヒト・モノ・コトの組み合わせ」による多様な教育プログラムの展開が、今後の博物館教育の大きな可能性を開いてくれるものと期待している。

#### 参考文献

- 文京区消費生活センター「おいしいものを食べよう手帳」
- 長島雄一「学芸員による出前授業（アトリーチ・プログラム）一福島県立博物館の場合一」JMMA研究紀要3号
- 三木美裕「子ども博物館と、エデュケーター」博物館研究 vol.33.NO.5
- ジョン・H・フォーク/リン・D・ディアーキング「博物館体験ー学芸員のための視点」雄山閣出版



## 「仙台文学館の展示」

安藤 淳一

株式会社 展示学研究所

### 1. 展示内容とその課題

仙台文学館は、明治から昭和初期における仙台ゆかりの文学者を仙台での動向を中心に紹介し、宮城県における近代文学の風土や特長、仙台の開明性、開放性を浮き彫りにすることを目的として設置された。当館で扱う文学者は島崎藤村や土井晩翠などのビッグネームをはじめとして、総数80名を超す。中には仙台ローカルの文学者もあり、必ずしも万人に認知度の高い内容を扱っている訳ではなかった。どちらかといえば、むしろマニアックであり、その人となり・作品世界を詳らかにするためには、多くの情報を提供する必要があった。要するに仙台文学館の展示とは、情報過多の展示であり、それを如何に肯定的に処理し、空間全体をまとめあげるかが、我々に課せられたテーマということができた。さて、このような前提条件をもとに、本文学館の展示方針を以下のように定めた。

### 2. 仙台文学館の展示方針—インテリジェン トミュージアムという方法論—

#### マニア性の肯定

東博など国宝級の資料がゴマンとある一部の博物館は例外として、多くの博物館で展示されている資料のほとんどは、一般にはその価値がわかりにくいものばかりである。それは本文学館にもいえる。これまでの展示においては、そうした資料の価値を少しでもわかりやすく伝えるため、マニアックな部分は極力排除し、解説は200字に抑え、分かりにくい論点は模型で示すなどの配慮がなされてきた。要するにそれは教科書的方法論による展示ということことができた。

しかし、こうした資料の魅力はディテールに宿るものなのだ。今までの博物館がお客様の為を思って行っていた展示は、実は資料の魅力を削ぐ結果になっていたのではないか。一ならば、いっそのことマニアックであることを肯定しよう。学芸員がどうしてもその資料を展示したい理由、あるいはその愛情、こだわり。そうした思いのだけを存分に語れる展示を目指そうじゃないか。それによって解説が長くなり、デザイン的に統一感がなくなったとしても、少なくとも学芸員の愛情=エネルギーは、伝わるはずだ。大切なのは“愛”をデザインすることなのだ。——今回の展示の出発点はここにあった。

#### 展示の情報（インテリジェント）化

同様にこれまでの展示は視覚的アピールに重点が置かれてきた。資料はできるだけ印象深く、模型は楽しく、グラフィックは美しく展示する。来館者はそれを見て「きれい

だった」「楽しかった」「かっこよかった」という刹那的な印象をもって帰る。これは銀座4丁目を歩く通行者と和光のショーウィンドウにおける関係性となんら変わらない。なぜ来館者は、展示を見て「勉強になった」「納得した」「知識が深まった」と感じないのか。——それは情報が足りないからだ。いみじくも、先程行われた日本展示学会—第18回研究大会—において、大分県立歴史博物館館長の岩井宏實先生は、展示の本質を“学術的・象徴的・情感的”なものと表現された。——卓見である。しかし、反面その方法論には、乗り越え難いハードルが存在することも確かだ。それは資料の学術性を象徴的に表現するというこの難しさである。すなわち、“学術的”な資料とは、えてして“叙述的”な性格が強く、“象徴的”に示し難いものなのだ。1万語の叙述によってようやくその本質が理解できるものを2百字に要約し、資料にピンスポットを当て、模型をその前に置く。こうした象徴的展示という方法論で作られた展示は、やはりどこか刹那的だし、資料に対する本当の興味を喚起しえない。もちろんそれが東博級の資料であれば別だ。しかし多くのミュージアム資料は、その魅力を引き出す語り部の力を必要としているように思う。象徴的というお作法でかしこまつて展示されている多くの資料は、私の目には、その本当の魅力を引き出されることのないまま放っておかれたダイヤの原石のように映るのである。資料について1万語の解説が必要なら1万語費やせばいいじゃないか。そしてその情報をどう受け取るかは、お客様の判断に任せればいいのだ。インターネットなどの現実が物語るように、来るべきデジタル社会とは、氾濫した膨大な情報を自分なりにチョイスする時代だ。それはミュージアムも例外ではないだろう。そんな社会の到来を見据え、本文学館の展示では、できるだけ多くの情報を提示することとした。

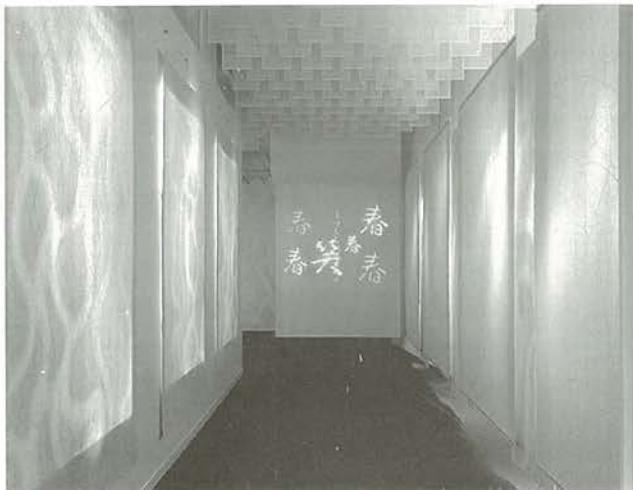
#### 長居できる環境（思索的環境）の構築

さてこのような展示の情報化にいち早く着手した事例として、東京大学総合研究博物館がある。さすが東大と言わざるをえない。がしかし、さすがの東大といえども肝心の点で詰めが甘い。つまり、展示の情報化はなされているにもかかわらず、その空間環境は依然として銀座4丁目和光前のままなのだ。

そもそも人は立ったままで情報が咀嚼できるようには作られていない。そんな人間にPDA（携帯情報端末）を与えて意味がない。PDAを活かすためには、とりあえず人を座らせる必要があるので。しかしそれだけではまだ駄目だ。銀座4丁目和光前に椅子を置いても、やはり情報に集中できないことに変わりはない。人が情報に集中するためには、その空間が“思索的空間”となっていかなければな

らない。

例えばそれは書斎や図書館、学校の教室、喫茶店などのように、人が長居をすることを前提とした空間だ。なんの予定もないある日の休日。映画や遊園地に行くには面倒くさいし金がない。図書館で静かに勉強という気分でもないし、喫茶店で暇つぶしといつても読みたい本もない。「金かけずにしかも体力も使わずに、なんかこう、テレビの『知ってるつもり』みたいなちょっとした知的娯楽に浸りたいんだけど、どこかいい所ないかなあ。」という気分の



和紙と文字（映像）による導入展示  
空間環境の構築を目指した。

ときに使えるミュージアム。今回の展示はこうした思索的空間環境の構築を目指した。

### 3. 本文学館の展示デザインー小学校の教室がデザインコンセプトー

さて、前述のような展示方針をもとに、本文学館は「資料やグラフィックを眺めるだけでなく、実際に本を読み、あるいは、学芸員が集めたスクラップ帳に目を通すことで、文学者たちの人となりや作品世界を深く理解することができ、同時にそれをどうしても伝えたかった学芸員のマニア心＝愛情にもふれることができる展示室」を目指した。それを空間に表現するため、以下のような方法論によって展示デザインを方向づけた。

まずは、文章をじっくり読むことができる学校の教室のような思索に適した空間を指向した。



硬質スチロールパネル（ゲータフォーム）を使ったグラフィック・ペルクロシートにマジックテープで止める仕組みにより簡単に展示替えができる。

そのために、展示室に椅子を配置し、それによって読書ができるようにした。

同時に、椅子の間近に机を配置し、ケース内に閉じ込められ読むことができない本をコピーし、また文学者についてのエピソードや学芸員の解説

を綴じ込んだ“スクラップ帳”を作成し、それを机の上に配置した。

さらに、グラフィックパネルも“スクラップ帳”と捉え、文字や写真になるべく規制を設げず、学芸員の出したい情報をできるだけ多く出せるよう、また学芸員が簡単かつ安価にその情報を差し替えできるようなシステムを作った。

そしてその机や椅子、ケースなどの什器は、我々の心象風景の中にある小学校の教室の雰囲気をもとにデザインした。例えばケースは学校の教壇のようであり、グラフィックパネルは黒板を思わせる。机や椅子はまさに学校の雰囲気そのままである。またその素材を木材とすることによって、「柔らかさ」や「温かみ」などの触感が情緒の安定に作用し、安堵感のある精神状態の中で読書に浸れる空間を目指した。

このような次第で、本文学館の展示デザインは構築された。



椅子に座りケース内資料を見る来館者



展示室点景1 “新しき詩歌の時代”

#### 4. 今後の文学館の将来像－書斎型展示環境の構築－

さて、最後に文学館の将来像というものについて、私なりの意見を記しておきたい。まず、文学館というものは、本質的にミュージアムと図書館の両方の体質を持っている。そして、そのスタンスをミュージアム体質によって規定されているということができる。要するに、文学館には“展示室”というものが必要なのだという認識から施設が組み立てられているのである。展示室というからは、やはりそこは資料を展示する場であって、作品を読ませる場ではない。従って読書したい人のために別途 読書コーナー、すなわち“図書館的体質”を付加しなければならない。——お

およそのような思考経路によって施設構成が規定されてきた文学館においては、読書空間と鑑賞空間が明確に分けられ、それが併設されている場合が多かった。これは言い換えるなら、ひとつの文庫本を手にした読者が、“著者略歴”と“帯の推薦文”と“巻末解説”を読むためにまず展示室に入り、その後に“本文”を読むために読書コーナーに立ち寄るという行動が不自然ではないとする考え方である。私は、そうは思わない。

文学者／作品に対する関心・興味を喚起すること。そしてそれをもとに読書行動へとつなげることは、一連の流れとして捉えるべきで、それを部屋の機能によって分断するのは、やはり不自然なことだ。このような方法論で作られた展示室（特に常設展示室）は、1回来たら十分で、リピーターを期待することは難しい。何度も来てもらう展示室を目指すならば、そこにはなにがしかの付加価値が必要である。その回答のひとつが“読書できる展示室”ということではないかと考えている。言わば親戚のリッチな叔父さんの家の書斎のような展示室。そこには座り心地の良い椅子が置かれ、叔父さんの趣味の本が並んでいる。しかもその叔父さんはマメな人で、置いてある本や文学者に対する思い入れ、感想、バックデータなどを詳細に記したノートをまとめてある。それを読むだけで何となく本を読みたくなり、つい長居してしまう。そんな“書斎型展示室”というのはどうだろうか。さらに、そこでは美味しい珈琲が飲めるとしたら。あるいは、すばらしい美声の持主（でき

れば妙齢の女性）による朗読が聞けるとしたら。——そんな文学館なら何度でも足を運ぶ価値があるとは言えないだろうか。少なくとも私はそんな文学館に行きたいと思っている。

##### 【仙台文学館】

住所：〒981-0902 宮城県仙台市青葉区北根2-7-1  
TEL:022-271-3020 FAX:022-271-3044

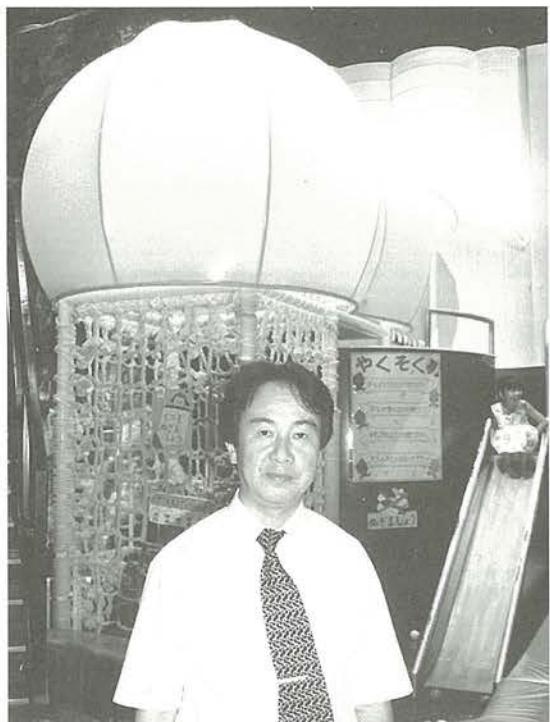


展示室点景2 “うたのことばに生きて”

MUSEUM  
ENTREPRENEUR

ミュージアムのエントロプルナ  
ミュージアムの運営において、果敢な取り組みを行っているミュージアム人にス  
ポットライトをあて紹介します。

## 自由闊達なアイデアマン 「そもそも論」を片手に 「集客と教育的側面」を意識した マネージメントを展開!!



「とにかく新しい事をするのが好きなんですよ」。取材の合間に飛び出したこの一言が、河原氏の人となりをよく表わしている。「こどもの城」との関わりは、高校で地学を教えていた教師から転任して3年になるそうだ。最初に、館長から言われたのが、「新しい事をやってくれ」ということ。さっそく新しい企画を立て、総務へ予算要求。すると、返ってきた言葉が「前例がない」というよくある一言。氏は、「新しい事をやるというのは、前例がない事に決まっている。」と言いつつ、企画を推し進めたとか…。以来、3年後の現在では、業務と総務との役割分担もうまく機能しているとの事。その結果が「こどもの城」の評判を生み、順調に推移している入館者数に現われている。

氏が、単なる「新しもの好き」ではないという事は、「ミュージアムのマネージメントは、集客と教育的側面を意識しながら、事業を推進しなければ…」という話から充分に伺える。今春の第4回全国大会・会員研究発表＆フォーラムの第一セッションに参加された方々には、氏のキャラクターが印象深く残っていると思われるが、おおよそ、おカタイと思われがちな「学会」でのプログラムが、氏の自由闊達さによって、珍しく、楽しくそれでいて有意義な時間になつたのではないか。その内容については、大会報告等を読んで

三重県立みえこどもの城

業務課長補佐 河原 孝氏

いただぐとして、ここでは、報告内容の基底にある、意識のありようを探りながら、お話しを聞くことにした。取材する私自身も同席した発表者であったという事や、過去の学芸員という経歴から、話の内容は、自然とミュージアム活動全般のあり方になった。

そこで、取材中に話題に上った、「河原流ミュージアム・マネージメント」のワンポイントアドバイスといった内容を通して、河原氏の人柄や考え方の一端を御紹介する事にしよう。

### 集客パブリシティーとマネージメントの ワンポイントアドバイス

「みえこどもの城」は、中部台運動公園の一角にあり、三重県と、松阪市が出資した財団が運営する施設である。松阪市的人口12万人に対し、こどもの城の年間入場者数が10万人という市内の類似施設の中でも一番の入場者数を誇る施設として、県・市民に親しまれている。ネーミングでも分かるように、厚生省の補助金を充当された施設ではあるが、市内に科学館がないという事もあって、児童館的施設が20%、科学館的施設が80%という割合になっている。4つの常設展示室と、スペースシアター、その他の施設、及び、企画展等の事業が行われている。河原氏は、これらの施設の運営全般と共に、広報・普及にも携わっておられる。大会報告にあったパブリシティーについてのポイントを伺うと、「広告料を貰ってポスターにチラシにスポンサー名を入れるよりも、掲示や配付を条件にして、スポンサー名を入れた方が、パブリシティー効果は大きいし、公的機関での金銭の処理という現実的な問題も回避できる」という。まさに、伝える対象とか、どうすれば確実に伝わるかといった「パブリシティー」という事の本質を見抜いておられる言葉である。

もう一つ、この夏の催しで、開館10周年特別展「恐竜展—鳥羽竜とその時代の化石」(平成11年7月28日～8月15日)についての新聞社への対応がおもしろい。

三重県が「センター博物館（計画推進が休止中）」用に収集した資料が、6年も眠っているということで、その活用という意味も込めて企画されたが、パブリシティーを行うにあたって、まず、記者クラブに資料配付した後、改めて、地元の支局にも配付されたそうだ。すると、反対に支局側からより詳しい資料を求められ、その結果、何紙もの新聞社がとり上げ、多くの集客効果となつて現われた。

あらかじめ記者クラブに配付しておけば、支局側からくる要請には個別に対応した情報を渡せるし、新聞社にとつても、独自の視点から記事にできるというメリットを生む。マスコミに対するこまめな対応が、記者との間で個人的な

リレーションシップを生み、オリジナルな情報提供もできる。記事になる事で集客できるし、人が集まるところにマスコミは注目し、記事になるチャンスも増える。これ等も、現



行の記者クラブ制度の盲点をついたアイデアであろう。

また、今のミュージアムは、研究活動にかたより、利用者側の視点に欠け、その事が、施設づくりにも現われていると言ひ、日常の業者との対応を例にして、施設側の教育的課題にそぐわないものづくりの現状を指摘された。よくある「研究とその成果の展示」にとどまるマネージメントのあり方に疑問を呈し、「集客と教育的側面を意識したマネージメント」を言われる。

あらゆるシステムの見直しが叫ばれている今日、ハード先行と、大量生産によるソフトの画一化が、ミュージアムづくり全体にも現われていると言ひ、マネージメントに於けるソフトの優位性と、地域社会の課題克服という視点からのオリジナルなコンセプトの重要性を述べられた。氏は、この様な現状を、「コンビニ的(手軽で同じものが並ぶ)ミュージアムづくり」と表現される。

今回の取材を通して、河原氏の一貫していた視点、自由闊達なアイデアの源泉が、教師時代から生徒に話し掛けられていたという「そもそも～」という言葉にあると感じた。この「そもそも論」こそ、氏の物事に対する姿勢を表わしていると同時に、物事に対する意識のありようであり、問題の原点を探り、根本の理念に迫る思考回路ではないかと思う。

大会後、話が聞きたいという依頼で出かける事もあるとの事。「こどもの城」の再整備や三重県のセンター博物館の建設にも関わりながら、今後は、公園内の施設や他のミュージアム、あるいは、大学や類似施設との連携も進めたいという抱負も語られた。これからも、講演や会議、打ち合わせといった場面で、河原氏の「そもそも論」が聞けることだろう。

最後に、河原氏の御健勝、御活躍をお祈りすると共に、長時間のおつき合いに対してもお礼申し上げます。

(取材／榎井喜孝)



## 三重県立 みえ こどもの城



開館時間：午前 9 時 30 分より午後 5 時 00 分まで

入館は 4 時 30 分まで

休館日：月曜日（祝日を除く）

祝日の翌日（土・日曜日の場合を除く）

年末年始（12月 29 日～1月 3 日）

入館料：

	個 人	團 体
大人（高校生以上）	390 円	320 円
小人（小・中学生）	無 料	無 料
幼児（3才以上就学前まで）	無 料	無 料
▼スペースシアター		
大人	590 円	470 円
小人	300 円	240 円
幼児	120 円	120 円

（団体は 30 人以上・但し小人以上）

交通機関：JR・近鉄松阪駅下車。バス乗り場 7 に乗車、約 15 分。

中部中学校前下車、徒歩約 12 分

伊勢自動車道松阪インターを出てすぐの信号右折。

県道丹生寺一志線を南へ約 4 キロ。国道 166 号立野交差点を左折、南へ約 1.7 キロ。2 つ目の信号を右へ約 400m。

〒 515-0054 三重県松阪市立野町 1291

TEL (0598) 23-7735 FAX (0598) 23-7792

研究部会活動報告1  
理論構築  
研究部会  
第1回研究会

## 「コレクション・マネージメント—ブリヂストン美術館の事例—」

講 師 ブリヂストン美術館学芸員 貝塚 健 氏

開催日時 平成11年6月5日（土） 10：30～12：30

場 所 国立科学博物館 3階会議室（東京都台東区上野公園7-20）

### 理論構築部会第1回研究会の実施報告

平成11年度の本研究部会においては、「21世紀の博物館の各機能にわたるマネージメント」をテーマとした研究協議会を行い、博物館の今後を考えようとしています。

第1回は、博物館資料にかかる諸問題として、「美術館のコレクションにかかる現代的な課題」について、「収集方針と修復・保存にかかる諸問題」「登録とコレクション管理」等の問題と今後の方向性などについて発表いただき、協議を行うこととしました。

今後も博物館の各論にかかるコレクションや資金運用、顧客調査等のマネージメントについて、研究協議を行うことを予定しています。

#### 1. 第1回研究会開催テーマ

「コレクション・マネージメント—ブリヂストン美術館の事例—」

#### 2. 講 師

ブリヂストン美術館学芸員 貝塚 健 氏

#### 3. 開催日時

平成11年6月5日（土） 10：30～12：30

#### 4. 場所

国立科学博物館 3階会議室（東京都台東区上野公園7-20）

#### 5. 研究・協議の概要

講演を依頼するに当たって、今回の位置づけをご理解いただき、特に次の点についての展開をお願いした。

- (1) コレクションのための資金運用の現状
  - (2) コレクション選定と取得方法にかかる問題
  - (3) 展示をはじめとする教育活動と作品にかかる環境等にかかる問題
  - (4) 移動等にかかる問題（クリエイターや学芸員の役割）
  - (5) 収蔵環境にかかる考え方の変化について
  - (6) 修復にかかる最近の状況
  - (7) 広くコレクションを収集展示する美術館の現代的な役割と未来について（21世紀の美術館・博物館はどうあるべきか）
- これに対し、貝塚氏からは以下のような概要（レジュメ）をいただき、それに従って説明を行っていただいた。

### コレクション・マネージメント—ブリヂストン美術館の事例

石橋財団ブリヂストン美術館学芸部 貝塚 健 氏

#### はじめに

- (1)日本の美術館では、まだ「コレクション・マネージメント」は確立していない。
- (2)ブリヂストン美術館には「コレクション・マネージメント」という言葉はない。
- (3)ブリヂストン美術館の運営形態は、日本の美術館の典型ではない。

#### 1. ブリヂストン美術館の概要

コレクション・マネージメントというよりも、レジストレーションという言葉を使っている。記録担当があり、その意味でもブリヂストン美術館は日本の典型的な美術館ではない。

#### (1)組織

ブリヂストン美術館は財団法人石橋財団が運営する。創設者が拠出した資金を基につくった財団である。組織は、館長を含め17名であり、学芸部門は8名（うち記録担当2、保存担当1、司書1）である。

#### (2)運営基盤

他の博物館・美術館より比較的大きい方であろう。

#### 2. ブリヂストン美術館のコレクション

##### (1) 狹義のコレクション—所蔵作品—

1,505点で、外国洋画199点、日本洋画199点、外国版画621点、その他彫刻・日本版画・陶器等である。日本の美術館の平均的数は数千点であろうから、多い方ではないだろう。

##### (2) 作品以外のコレクション

①ハードの情報

文字情報：図書・アーカイブ・ドキュメンテーション

非文字情報：音声記録、画像記録

②ソフトの情報

館内の「常識」、「記憶」、「ノウハウ」など、記録されていないものも重要である。その対応は今後の大きな問題である。

3. 作品にかかるマネージメント

(1)明文化された“コレクション・マネージメント”

「石橋財団寄附行為」「美術館則」「美術品管理規程」「美術品貸出規程」が定めている。

(2)実際に行われている“コレクション・マネージメント”

現在新しい理念を構築中である。収集方針、記録・管理、予防的保存・修復、貸出、保険、防犯・防災、海外貸出、作品画像の管理（著作権・使用権）等の項目で検討を行っている。

4. これから“コレクション・マネージメント”

「これから」を考える前に、まず「20世紀の美術館」を完成させること

<平成11年度理論構築部会研究会の今後の予定>

○第2回研究会（10月）テーマ：「コレクション・マネージメントーその2ー」

「日本の自然史系博物館の現状と課題』一次資料と二次資料を中心としてー」

栃木県立博物館副館長 樋口弘道 氏（予定）

「理工系博物館の資料調査と資料の登録について」 国立科学博物館 前島正裕 氏（予定）

○第3回研究会（12月11日）テーマ：博物館利用者についての調査 国立科学博物館 長畑 実氏（予定）

○第4回研究会（1月末頃）テーマ：博物館の運営資金（場所、発表者未定）

（理論構築部会長：高安礼二）

研究部会活動報告2  
ミュージアム文化  
研究部会  
第1回研究会

## 生涯学習と博物館

日時：平成11年7月8日 18:30～20:30

会場：株式会社 三菱総合研究所 大会議室

話題提供者：大西 珠枝氏（文部省生涯学習局社会教育課長（当時）、元掛川市教育長）

## 大西氏の講演及び配付された資料の概要

### 1 生涯学習行政における博物館

#### (1)博物館の現状

近年、博物館数が増加傾向にあり、中でも類似施設の数が急速に伸びている。また、系別にみると、科学系、歴史系、美術系の博物館が多く設置されている。

しかし、1館当たりの入館者数は年々減少している。また、1館当たりの職員数も減少傾向にあるが、ボランティア登録者、活動人数は大幅に増加している。

#### (2)博物館等に対する基本政策

生涯学習審議会から、昨年来注目すべき答申が出された。

「社会変化に対応した今後の社会教育行政の在り方について」（平成10年9月）では、社会教育法制定以来約50年間の社会変化等を踏まえ今後の社会教育施設の運営体制や指導体制の整備など社会教育行政の在り方が取りまとめられた。その中で、地方分権と住民参加の推進、地域の特性に応じた行政の展開、ネットワーク型行政の推進、学習支援サービスの多様化等を提言。博物館に関して、地方自治体の自主的な取り組みを促進する観点から、①博物館の望ましい基準の大綱化・弾力化と公立博物館の学芸員定数規定の廃止、

②博物館設置主体に関する要件の緩和などを提言した。

「生活体験、自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」（平成11年6月）では、10年度の文部省調査で、「生活体験」、「お手伝い」、「自然体験」をしていることと「道徳感・正義感」が身についていることの間に高い相関の傾向が見られるなどを紹介。①子どもたちの体験の機会を広げる、②地域の子どもたちの遊び場をふやす、③情報提供、相談体制の整備など地域社会における子どもたちの体験活動などを支援する体制をつくる、④子どもたちの活動を支援するリーダーを育てるなどを答申し、博物館や美術館を子どもたちが楽しく遊びながら学べる場にすることを提案している。

「生涯学習の成果を生かすための方策について」（平成11年6月）では、生涯学習の成果を①「個人のキャリア開発」に生かす、②「ボランティア活動」に生かす、③「地域社会の発展」に生かすことを提言し、特に博物館においては、住民ボランティアの受け入れを社会的な責務と捉えることが必要であることを指摘している。

このような答申の趣旨を受けて、地方分権の推進を図るために政府一括法により社会教育法等の関係法令を改正するとともに、平成11年度から3か年計画で「全国子どもプ

ラン」を実施し、家庭教育手帳の配布、電話相談体制の整備、子ども放送局の開設、省庁連携の体験活動などを進めている。

学校の完全週5日制に対応するため学習指導要領が改訂され本年4月に告示された。学校の週5日制の実施に当たっては、土曜日や日曜日に子どもたちが生活体験や自然体験、社会体験等をすることにより、「ゆとり」の中で「生きる力」をはぐくむことが望まれており、博物館もそのための重要な役割を果たすことが期待される。

### (3)博物館振興施策

人々の多様化・高度化する学習活動を支援する生涯学習の中核機関として、博物館が多様な機能を発揮するため、国立の博物館等の整備、調査研究を進めるとともに、公立博物館については施設整備費補助金を廃止したように、ハードへの支援から専らソフトの支援を図っており、学芸員等の研修を実施するほか、地方自治体に行う各種の事業に対して助成措置を講じている。平成11年度には、土曜日を中心に実施される、「親しむ博物館事業（見て触れておもしろ体験博物館）」、「こども科学・ものづくり教室の全国展開」などを新たに始めた。

「科学系博物館活用ネットワーク事業」（博物館と学校、関係団体等がその専門性や特色を生かしたモデル的事業を行う）は、本年度8つの協議会に委嘱している。

## 2. 生涯学習都市・掛川市

### (1)掛川市の生涯学習運動

昭和54年、市制25周年に当たり生涯学習都市を宣言。平成2年、生涯学習10カ年計画パート2として「地球・美観・德育」都市の宣言を行った。

生涯学習運動は、「まちづくりは人づくり」、「人づくりは生涯学習」という考え方から「随所の時代」との認識に立ち、選択的住民（この町を選んで住む住民）の誇りを持ち過疎化を乗り越えるための町づくり・人づくりから始まった。

(2)地球掛川学研究所「とはなにか」学舎の開設（平成7年度）

「地球とはなにか」、「人間とはなにか」、「社会とはなにか」という視点からわがまち、わが地域を学びながら、生涯学習のリーダーを育てる単位制の講座。

市内に点在する「掛川36景」を実際に訪ね、見て、触れて体験し、その素材を体系的に学ぶ。地球田舎人=①掛川の土・森・農、②東京の一角、③地球のどこかの3つの土地勘を持ち生涯学習を推進できる教養人を育てることを目標とする。2年制の講座で、掛川36景現地実習、専門講議・演習、教養講義・実習、グループワーク、課題研究等で構成され、修了者には「とはなにか学士」を授与する。

## 参加者と大西氏、研究部会長の間の質疑、意見交換の概要

### 1. 博物館の運営について

(1)博物館法等の改正に伴い、「類似施設」が「相当施設」に指定されることにより、私立博物館は開銀などの低利融資が受けられ、国立博物館は各種の国の補助等の支援が受

けられるようになるが、今後、メリットの拡充について検討したい。

「相当施設」が増えることにより、博物館間の「つながり」が広がることは大きな意義がある。特に、教育委員会と首長部局の連携推進を期待したい。

(2)博・学・地の連携に伴う、学芸員など職員の増員等が望まれるが、予算措置として人員増を図ることは困難。職員の資質の向上を図るための研修の拡充を図りたい。

(3)広域の市町村が連合して博物館を設置・運営することも考えられるが、「わがまち」との意識が強いので、行政権を越えた運営は難しいようである。

### 2. 博物館の活動について

(1)博物館におけるボランティア活動の単位認定について、学んだ内容とそのレベルが明確にならないと、高校の単位等に認めることは困難である。

(2)学校と社会教育施設の連携について、それぞれが対等の立場にたち一つのシステムとして機能する「学社融合」の考え方方が、最近注目されている。

(3)博物館で言う「ハンズオン」は、研究成果を生かし、子どもたち自らが気づき、考えるきっかけとなるようなものを考えている。児童館では困難かもしれない。

### 3. 博物館に関する評価について

(1)近々独立行政法人化が予定されている国立博物館の運営に必要となる評価についての検討に着手したばかりである。入場者数や入館料収入が注目されがちであるが、事業、展示の質も視野に入れた評価を考えていきたい。

(2)評価は、実施することに意義があるのでなく、結果を改善に繋げることが必要である。国立の博物館・美術館は、近く独立行政法人に移行する。公立の博物館も第3セクター化や運営の民間委託が進み、市立博物館と運営上類似してきており、評価は、マネジメントの重要な要素になっている。本研究部会でも、他の研究部会と協力しつつ評価に関する検討を開始したい。

（ミュージアム文化研究部会長：沖吉和祐）

（ミュージアム文化部会研究会の今後の予定）

○第4回研究会（平成11年12月から平成12年5月を予定）

テーマ：「ミュージアム・マネジメントの点検評価を試みる」

ゼミナール形式で開催（参加希望者はあらかじめ登録する）

会場は未定

○第5回研究会（平成12年3月を予定）

テーマ：「科学系博物館活用ネットワーク事業」（文部省委嘱の成果）

会場は未定

## 時の話題

ミュージアムを核とした町づくりの話題や、ミュージアム関連の新制度など、ミュージアム・マネジメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。

### 『博物館基準に関する基礎研究：イギリスにおける博物館登録制度』

竹内 有理

#### ■ 「博物館とは何か」

博物館基準研究会では、昨年1年かけてイギリスの博物館登録制度についての研究に取り組んだ。まずは、その内容を知るために、『登録の指針』等の翻訳を行い、さらに、同制度についての考察やアメリカおよび日本の類似の制度との比較検証などを加えて、今年3月に『博物館基準に関する基礎研究：イギリスにおける博物館登録制度』として、研究成果を刊行することとなった<sup>1)</sup>。

このような研究に取り組むことになったそもそもの動機は、「博物館とは何か」という根本的な問いをもう一度検証してみたいということだった。1951年に制定されたわが国の博物館法を見ても、残念ながらその解答を得ることはできないし、その他に博物館の望ましいあり方を述べた包括的な指針や規程があるわけでもない。そこで浮上してきたのが、イギリスの博物館登録制度だった。博物館協会<sup>2)</sup>によって定められた博物館職員や管理運営機関のための倫理規程を踏まえた形で、博物館登録制度が博物館・美術館委員会<sup>3)</sup>（以下MGCと記す）によって1988年から実施されている。われわれは同制度の登録要件となっている基準を見ることによって、「博物館の望ましいあり方」像をつかむことができるのではないかと考え、研究を進めていった。

「博物館基準」はMuseum Standardの訳であるが、standardには「基準、規範、尺度、手本、道徳的規範、倫理、水準、規格」などの日本語訳がある。博物館基準について考えることは、それらすべての言葉が意味するものを考えることなのである。

表1 「登録の指針」項目一覧

項目	指針	登録要件
1.博物館	1.1 博物館の定義 1.2 「国立national」博物館という名称の使用 1.3 登録資格のない施設 1.4 全国規模の複数箇所にまたがる組織 1.5 博物館登録の資格はないが、MGCまたはAMCからの補助金交付の対象となる資格を有する組織	A.イギリス博物館協会による博物館の定義を満たしている B.館名に「国立national」またはそれに相当する語を含んでいる場合は、MGCによる「国立」博物館の定義を満たしている
2.博物館の管理運営	2.1 規約 2.2 収蔵品の位置付け 2.3 管理運営の取り決め 2.4 設立趣意書と主要目標 2.5 方針策定と管理運営に対する専門家の助言	A.適切な規約がある B.収蔵品が公共の利益のために長期にわたって保管されるという証拠がある C.収蔵品管理に関する正式な取り決めがある D.博物館の設立趣意書と主要目標がある E.方針策定と運営管理に対する博物館専門家の助言を得られる
3.専門家の助言を得る機会	3.1 スタッフ構成 3.2 学芸的な助言 3.3 保存修復に関する助言 3.4 スタッフの研修と養成	A.有給、無給、常勤、非常勤を問わず、博物館の責務を果たすのに十分なスタッフがいる B.専門家による学芸的な助言が得られる C.専門家による保存修復に関する助言が得られる
4.収集方針	4.1 質収蔵品 4.2 取得および処分についての方針	A.重要な質借資料を含む博物館の収蔵品について説明できる B.登録要件を満たす資料の取得および処分についての方針がある
5.ドキュメンテーション	5.1 ドキュメンテーションの方法 5.2 過去及ドキュメンテーション 5.3 ドキュメンテーションのマニュアル	A.基本的な記録を保持している B.未整理資料がある場合、所定の期間内にそれらをなくす計画がある
6.収蔵品管理	6.1 保存修復 6.2 リスク対応と安全管理システム 6.3 緊急事態のための計画	A.収蔵品を保存するために適切な措置を講じてきたことを証明できる B.収蔵品の安全を確保するために適切な措置を講じてきたことを証明できる
7.博物館の公共的側面	7.1 開館時間とアクセス 7.2 公共サービス 7.3 来館者用施設・設備	A.博物館の性格と場所にふさわしい開館時間とアクセスに関する取り決めがある B.博物館の性格と規模にふさわしい公共サービスを行っている C.博物館の性格と規模にふさわしい来館者用施設・設備がある
8.財務管理	8.1 予算と会計 8.2 財務計画 8.3 博物館の建物	A.過去2年間の予算または会計の提出 B.予算策定を計画的に行っている C.博物館の建物を長期的に確保できる
9.申請内容についての同意	9.1 内部承認 9.2 法律、計画、安全性の要件	A.設立趣意書・主要目標・取得・処分の方針、学芸アドバイザーの任命に対する内部承認 B.最高意思決定機関による誓約

本稿では、紙幅の都合上『登録の指針』の内容には細かく触れないが、わが国の現状に照らし合わせて参考となる登録制度の特徴についていくつか述べてみたい。

#### ■博物館の多様性を重視した必要最低基準制度

いくら高い基準を設けても、質的に向上していくとは限らない。このことを、イギリスの登録制度は如実に物語っている。規模や運営形態、テーマに至るまで、あらゆる面で多様化の進む博物館に適用できる統一の基準として、MGCの登録制度では、必要最低基準を採用している。とはいっても、わが国の博物館法や設置基準と比べると、はるかに具体的かつ実践的なものになっている（表1）。

同制度では、細かなデータや数値の提示を求めるのではなく（予算や会計報告を除く）、博物館の活動全般にわたる様々な事項に対し、博物館はそれにどう対処しているかという行為や姿勢を重視しているのが特徴である。このような評価の方法を探っているため、博物館の多様性を損なうことなしに、同制度で求められている要件がすべての博物館に適用できるのである。

#### ■活動方針の明文化と共有化

博物館の姿勢や取り組みを示す方法の一つとして、明文化された方針文書の作成がある。同制度では、館の使命や目標、計画を明文化した推進計画や収蔵品の収集や管理に関する取得・処分方針の作成を特に重視しているが、その他にも教育方針や来館者サービスの方針、障害者への対応に関する方針などの作成を推奨している。これらの方針文

書の作成のしかたについては、『登録の指針』とは別にMGCがそれぞれ個別に手引きとなる資料を発行しているので、それを参照することもできる。

博物館の様々な活動に関する方針を明文化することによって、館の目標が明確化できるとともに、スタッフはもちろんのこと、館内で働く人すべてに目標や活動方針が共有されることは博物館の運営にとって非常に重要である。

実際、同制度が導入されてから推進計画や収蔵品管理に関する方針は、多くの館で作成されるようになり、一定の成果が得られたといえる。

### ■収蔵品に重点を置いた登録制度

博物館が他の施設と異なるのは、やはり資料を収集、管理しているということである。同登録制度では、資料の収集や管理、収蔵のあり方について、特に重点を置いている。資料の収集については、法制度の認識や倫理に係わることを指針の中で細かく述べていること、そして、ドキュメンテーションに関して独立した項目を立てていることからも、その重視の程度がうかがえる。

また、興味深いのが、「登録資格のない施設」として、収蔵品を持たない科学館（science centres）やプラネタリウム、水族館、動植物園などを挙げていることである。

### ■今後の展開

約10年にわたりイギリスで施行してきた博物館登録制度は、1999年現在で約7割の博物館が登録もしくは仮登録の認定を受けていることからも、一定の成果が得られたといえるだろう。5年ごとに行われる再審査を2002年に予定して

いるが、次の登録審査では、教育活動や利用者サービスに焦点を当てたものにするという。博物館を取巻く環境の変化を受けて柔軟に対応する姿勢が、同制度の形骸化を防ぎ、実効性のあるものにしているといえるだろう。2000年4月からMGCは図書館部門と統合されるなど、MGC自体が大きな変化に直面している。また、博物館の評価制度が政府によって新たに導入されようとしている。そのようななかで、今後イギリスの博物館登録制度がどのように展開していくのか、予断を許さない状態である。

わが国でも、博物館に限らずいろいろな分野で事業の「評価」が注目されているが、博物館の評価を考えるにあたっては、やはり、「博物館とは何か」というところから出発して評価項目や基準を考えていってもらいたいものである。『博物館基準に関する基礎研究』が多少なりともその一助になれば幸いである。

### 脚注

- 1) 同研究は財団法人日本博物館協会の助成を受けて行われた。詳しくは博物館基準研究会編『博物館基準に関する基礎研究：イギリスにおける博物館登録制度』（執筆：金子淳、久保内加菜、佐々木秀彦、守井典子、竹内有理）を参照していただきたい。
- 2) 博物館の質の向上を目的に1889年に設立された民間（非営利）の博物館専門組織。
- 3) 1931年に設立された文化・メディア・スポーツ省の外郭機関。博物館に関する様々な問題について政府に提言を行い、博物館に対しては技術的、経済的支援を行っている。

## 昭和シェル石油「シェルミュージアム」について

株小林工芸社 弓場 哲雄

をメッセージとして伝えていくことにより身近に感じできるパートナーとして、認知していただくことを目指して開館したものです。

このミュージアムの特長は、館の運営が「自己核算型」を前提としていることです。多くの企業ミュージアムはその企業の宣伝予算等による運営費に依存していますが、このミュージアムはシェルグループが北米、ヨーロッパ、日本で展開している「セレクト」という物販事業からミュージアムショップ、カフェの商品開発や経営ノウハウを導入し、その収益をミュージアムの運営に当てています。その為、館の構成は90坪とコンパクトでしかも、ミュージアム・ショップ・カフェは各々1/3の30坪づつを割り当て、ミュージアムについてのオペレーションもショップ、カフェスタッフが兼任し、人件費等の削減も図られています。

30坪のミュージアム部門は余りにも狭く、ミュージアムとは言えないかも知れませんが、ショップとカフェもミュージアムの重要な一部と考えられる昨今、90坪全体の中でショップやカフェの商品コンセプトもその目的に従って統一された内容で構成されております。

又、1年6ヶ月という短期間でコンテンツを作成、極めて少ない企画経費でミュージアムを作ることが出来ました。そ



### Press Release

トロリアム・カンパニーとして創設モータリゼーションを始めとする様々な分野の常に最前線で活動してきた昭和シェル石油グループの各時代における世相や文化・トピックを映した独自の資料と時代の発展や担ってきた専門知識、技術とが集積されたこれまであまり紹介されたことのない資料を21世紀の可能性への抱負として展開しました。又映像等による展示、ワークショップ等の参加型イベントを通じてシェルグループの多岐にわたる企業活動の内容やその理念

の理由としては100年に渡る歴史の中で、その膨大な資料をシェルグループがまとめ、保存していたことです。3万4千点のウェブ、100巻にのぼるVTRフィルムなど企画をする上で既に素材が揃えられていたということです。

全ての要素を展示することによる、展示スペース及び館の増大化を避け、統一されたテーマで段階的に企画展示することを一つの方法と考え、「Energy of Life」(エナジー・オブ・ライフ)という人々の暮らしの中での喜びや感動、発見などによって実感される「生」の活力をエネルギーとして捉えたテーマのもと、

企業理念に則した継続性の高い今後のコンテンツを作成していきます。

そしてこのミュージアムをPRする為のネットワークも完備していました。それは200万人のシェルXカード会員と会員に配布するEXTENTIONという情報誌の存在です。この情報を通じてミュージアムの告知とミュージアムグッズの通信販売や、企画展、イベント等の告知等、多岐にわたってミュージアムの活動をPRすることが出来ます。

このように現状の企業における様々な利点を活用することにより、開館に至る経費や開館後の運営費削減を実現し、関連する事業の収益によって自己清算型のミュージアムを完成させたことは今後の企業ミュージアムの在り方に一つの方法を示唆したと言えるのではないでしょうか。

### シェルミュージアム 各施設



ミュージアム

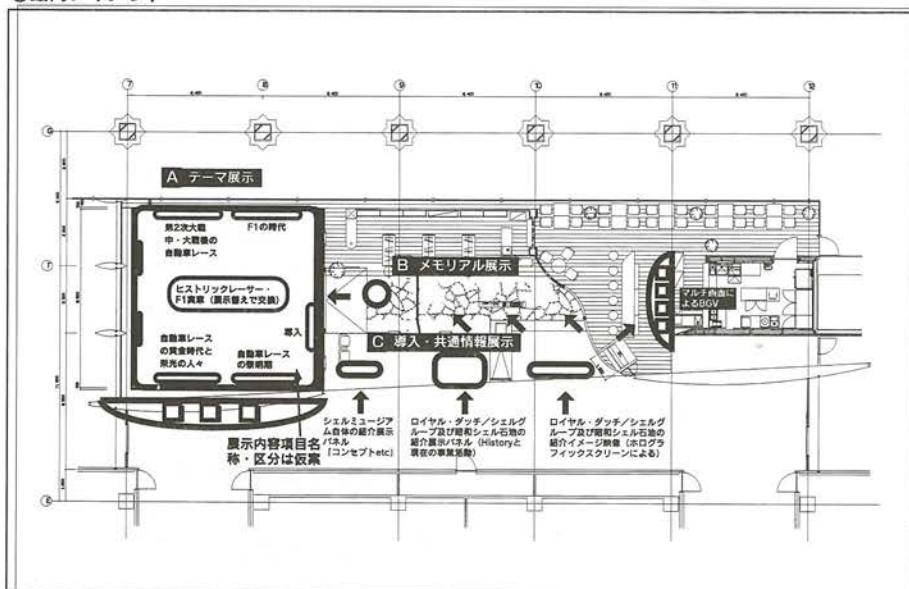


ショップ



カフェ

#### ○館内レイアウト



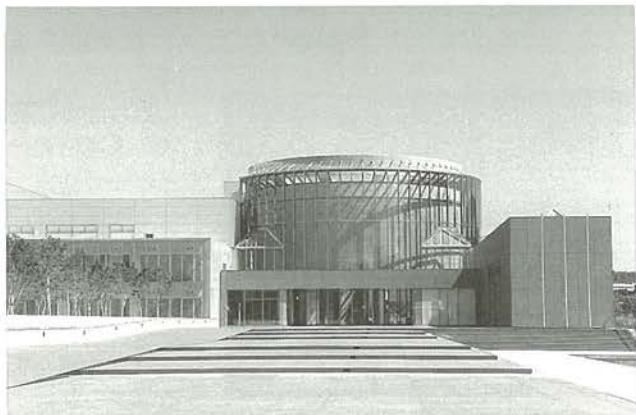
#### <シェルミュージアム>

- 住 所 〒135-8074 東京都港区台場2丁目3番2号(台場フロンティアビル)
- 電 話 03-5531-5883
- 休 館 日 水曜日(但しシーズンにより休館日は異なりますのでお電話にてお問い合わせ下さい。)
- ア クセス 新交通ゆりかもめ「お台場海浜公園駅」下車1分 または  
臨海副都心線「東京テレポート駅」下車3分
- 入 場 料 無 料

## 東北からの発信をめざして 10月9日（土）東北歴史博物館オープン

宮城県が二十一世紀に向けた東北地方の文化の拠点として、多賀城市に整備をすすめてきた東北歴史博物館が10月9日（土）にオープンを迎えます。

昭和四十九年に開館した東北歴史資料館の活動を受け継ぎ、新世紀に向けてさらなる飛躍をとげるためのリニューアルです。



まず、施設の概要について説明します。一階には4つの展示室があり、それぞれに特色のある展示を行っています。「総合展示室」は東北歴史博物館の顔であり、旧石器時代から近現代までの宮城・東北の歴史について展示しています。「映像展示室」では東北地方の民俗行事を館独自の切り口でまとめた映像を上映します。「テーマ展示室」では3つのテーマを取り上げて、資料そのものの美しさを鑑賞することを目的とした展示を行います。

また、「特別展示室」では、開館記念特別展「祈りのかたち—東北地方の仏像—」を開催します。今までまとまつたかたちで展示される機会にめぐまれなかった東北地方の仏像を、関係者各位のご理解とご協力によって一堂に集めました。開催期間は10月9日（土）から11月14日（日）までです。

三階には当館の独自の施設である「こども歴史館」があります。大型映像やパソコン、簡単な体験などを通して、子供から大人まで楽しみながら歴史に興味を抱くきっかけを得ることを目的としています。また、歴史に関する図書やビデオ、館蔵資料のデータベースを検索できるパソコンがある「図書情報室」では知りたいこと調べたいことを来館者の方が自分で調べることができます。そして、博物館の敷地内には宮城県指定有形文化財の今野家住宅が移築復元されており、農家の暮らしを体感できます。他にも博物館の脇にある池を見ながら、お客様にゆったりとくつろいでいただけるレストランや、ミュージアムショップも用意しました。

このように、施設としては幅広い分野に対応できる多様な展示と教育普及、ソフトサービス施設の充実をはかりま



した。

また、博物館の組織につきましても大幅には見直しがはかられました。旧来の資料館におきましては考古学、民俗学、古文書の3分野による調査研究活動が行われてきました。このたび新たに美術工芸、建築史が加わり、県立総合歴史博物館としてあらゆる分野に対応できるように人員の充実がはかられました。また、組織として特長的な点は、管理部に設置された情報サービス班です。これまで、必要性がありながらも役割として明確化されていなかった、対外的な情報提供や広報活動を一つのセクションとして独立させました。

東北歴史博物館は10年間という長い準備期間を経て、ようやくスタートラインに立つことができました。まだまだ多くの課題を抱えていますが、二十一世紀にふさわしい新たな博物館像を模索しつつ、様々な試みをこれから活動のなかで徐々に展開していきたいと思っております。

### 東北歴史博物館

所在地 宮城県多賀城市高崎1-22-1  
電話 022-368-0101  
開館時間 9:30~17:00  
ホームページ <http://www.thm.pref.miyagi.jp/>  
電子メール webmaster@thm.pref.miyagi.jp



## 新刊紹介

### 一人を呼ぶ知的ふれあい見世物づくりのノウハウ 「ミュージアム集客・経営戦略」

塚原正彦・著

発行所：株式会社 日本地域社会研究所

コミュニケーションズ・ブックス 2.000円（税別） ISBN-89022-783-0



ミュージアム 集客・経営戦略 塚原正彦

コミュニケーションズ・ブックス

本書は、これまでのミュージアム論から一歩離れた処に身を置き、著者自身の学びの軌跡である経済学（経営工学）というフィルターを通して、ミュージアムと社会との関わりを俯瞰しつつ、「二十一世紀のリーディングインダストリー」としての「ミュージアム産業論」を提起し、この視点から見たミュージアムの集客・経営戦略及び、その成果としての富の創造プロセスが、具体例をもつて提示された本である。

構成は、二部構成となっており、第一部「新しい富と文明を生み出すミュージアム産業論」では、人々の消費現象を、文明史的な視点から洞察し、そこから未來の兆候を見い出すという「未来予知」の方法論から、二十一世紀社会に於いて、ミュージアムが、地域の富を創造する可能性と、それを実現するための課題を明らかにしている。また、第三部「ミュージアムの生き残り戦略」では、コストをかけないで、ミュージアムが富を生み出すノウハウを、具体例を交えたマニュアル形式で示している。

戦後五十年の我が国は、あらゆる意味で経済に特化した経済社会であつたといふ認識のもとに、これから社会のあり方を、「モノ社会からコト社会への転換」とした上で、わが国が目指すべき方向を、「教育国家」であり、「文化國家」ではないかと論じ、その中でのミュージアム活動の果たすべき役割述べている。

著者は、ここで、ミュージアムというものを、人・もの・情報の集積からうまれる「相互作用による知の創造環境」と

して捉え、その利用者サービスのあり方を、利用者のたゆまざる知の成長への寄与として位置付け、独立採算制への移行やPFIへの転換が求められるミュージアムの自己革新を求め、その為の「二十一世紀型ミュージアムのビジョン」を示しつつ、「変革へのポイント」や、「成功への八つのヒント」等、さまざまな成功事例や具体例を示してみせる。まち全体を、そして生活文化や商店街、学校や公共施設をミュージアム化してイノベーションする事で、「限りない成長」の機会を提供する「ミュージアム産業」が生まれ、ミュージアム自身の再生と同時に、商店街の活性化や、中心市街地の活性化にも貢献できるとしている。

以上のように、時代を見つめ、ビジョンを示し、具体化の方策を提示したことによって、本書は、いわゆる「博物館人による博物館論」に陥っていないという点で、ミュージアム関係者ばかりではなく、広くTMOやPFI、都市経営といった事に関わる人たちへの好適の書ともなっている。

また、全体を通して、利用者サービスという視点からの展開はあるが、ここで示されている考え方や取り組む姿勢は、一方でミュージアムを作り立てる「展示活動」や、「情報化のあり方」についても、多いに参考となる書であるという事を評者の立場から附記しておきたい。

（評者 横井喜孝  
コミュニケーションズ・ブックス  
ミュージアム工学研究所）

## 掲示板

### 「企業ミュージアム」を改訂出版

全国の企業が開設した企業ミュージアムや記念館、博物館、科学館などを網羅し、意義づけしたガイドブック「企業ミュージアム」（新書判、240頁、税込み価格1,000円、98年2月初版）が改訂され、第5版が去る8月20日に出版された。

新たに追加された内容は①新設・開設された企業ミュージアム…「NTTドコモ開発センター展示ホール」「渋沢史料館」「神戸ランプミュージアム」「日本マクドナルドミュージアム」「京セラファインセラミック歴史館」「紙の博物館」など。②増築・改装された企業ミュージアム…「トヨタ博物館」（新館の増築）「菊正宗酒造記念館」（神戸地震からの復興）「TEPCO電源PR館奥利根」「西部ガスミュージアム」「トヨタ会館記念ホール」など。③企業ミュージアムの電話番号、所在地の変更・増補。④博物館データの平成8年度文部省社会教育調査結果の掲載・追補。⑤休廃館その他。

これらの改訂によって、利用者の便宜に一層役立つ、「企業ミュージアム」の専門ガイドブックとして充実いたしました。

発行所：(株)ピーエヌエヌ TEL・FAX06-6872-0969

著者：亀田 訓生 〒565-0855 大阪府吹田市佐竹台3-8-3

### 「志（私）塾サミット」

まさに「世紀末」の様相とも思われる混迷と不況が被う今日、新しい未来へ向けての「志」とその「志」に根ざした「人づくり」が極めて重要な意味を持つと思われます。

『江戸末期、大阪適塾に集った志士に学び、京都東山の幕末動乱の史跡を巡る』（全国私（志）塾ネットワーク 代表世話人：大西啓義の提唱企画）副幹事として千里一水会（代表、亀田訓生（企業ミュージアムコンサルタント）が参加を募っています。

11月13日(土)12時半、「適塾」集合（大阪市中央区 地下鉄淀屋橋駅下車東南徒歩5分）

「適塾」見学と説明

15時～20時半、緒方洪庵と適塾について講演（梅渕昇適塾記念会理事、阪大名誉教授）及び参加各塾の志と実践の発表ならびに懇親交流のパーティーを開催。会場はライオンズホテル大阪、大宴会場（06-6201-1511、大阪市中央区高麗橋2-2-10）。13日分参加費壱万円。

11月14日(日)9時半 京都、八坂神社正面石段上ったところ（京都市東山区祇園町北側625）集合。靈山歴史館（京都市東山区青閑寺靈山町1、特別展坂本龍馬の重要文化財10点－去る6月文部省より指定された直筆の書状、短銃など）。円山公園坂本龍馬像、明治維新の志士四十四人の墓などの見学の後、昼食は三年坂にある志士ゆかりの料亭明保野跡の料亭にて京弁当を賞味します。散策後15時解散の予定。14日分参加費は四千円。

申込み、問い合わせは、亀田訓生 TEL06-6872-0969 FAX06-6872-1101へ。参加費は申込と同時に郵便振替で。口座番号（00920-2-109205）口座名（株式会社ピーエーネット）へ。

URLは <http://ss4.inet-osaka.or.jp/~senri>

(文責：亀田訓生)

## インフォメーション

## INFORMATION

### 研究会開催事項に関するお知らせ

きたる10月30日に開催予定の、平成11年度第3回事業戦略部会研究会「別荘地における町づくりとリレーションシップ～新たな地域文化の発掘と育成への試み～」において、新たに土屋芳春氏（軽井沢絵本の森美術館・エルツおもちゃの博物館長）をお招きして、お話をうかがうこととなりました。より多くの方々のご参加をお待ちしております。

町づくりにおける市民のスタンス

別荘地における町づくりとリレーションシップ

～新たな地域文化の発掘と育成への試み～

講 師：三輪 正弘氏（建築家・武蔵野美術大学名誉教授）

ケーススタディリポーター：土屋芳春氏（軽井沢絵本の森美術館・エルツおもちゃの博物館長）

集合場所：ギャラリー 蔵

長野県軽井沢町長倉2487 市村記念館敷地内（旧雨宮御殿）電話 0267-46-1900

日 時：平成11年10月30日（土） 13:30～17:00

宿泊施設を一泊3,500円（宿泊のみ）でご利用可能です。ご希望の方は、事前に事務局までお問い合わせ下さい。

電話またはファックスにて 03-3455-1505（ご所属と氏名をお伝えください）

## 平成 11 年度大会の準備をはじめました

本年度も既に半分以上が経過しました。皆さんそれぞれにご活躍のことと思います。

事務局では、大会準備に取りかかっております。今回は第 5 回にあたり、20 世紀の締めくくりの大会になります。まだ、素案の段階ではありますが、大会の概略をお知らせします。ご質問、ご要望等がありましたら事務局までお知らせください。

### 平成 11 年度 日本ミュージアム・マネージメント学会大会の概要（案）

◆日程 平成 12 年 3 月 4 日（土）～平成 12 年 3 月 5 日（日）

◆総括テーマ 21 世紀のミュージアム・マネージメント  
～ミュージアムとリレーションシップ～

◆プログラム

【第 1 日目】	10:30～11:30 理事会
	11:30～12:30 昼食
	12:30～14:00 総会、学会賞表彰式
	14:10～16:10 シンポジウム
	16:20～18:00 分科会
	18:30～20:30 懇親会

#### 【第 2 日目】

9:30～11:00 研究発表
11:00～12:00 研究部会総括
12:00～12:15 閉会式
14:00～18:00 ‘アフタヌーン・ミュージアム’～地域資源をまるごと ミュージアムにする新しいモデルプログラムの開発方法の提案～ くもはやミュージアムは、ハコの中にとどまるのではなく、地域社会へひろ く開かれなければならないという趣旨から、今回は、はとバスを使って、 JMMA が、モデル的に東京のある地区的資源を生かした「知の散策モデル」 を提案します。

※第 5 回大会では、会員からの研究発表を募集することを予定しております。現在は、一人あたり 15 分を想定していますが、発表者の人数をつかみかねている状況です。会員研究発表の正式な公募については、大会の詳細が正式に決まり次第お知らせいたしますが、発表を希望なさる方がいらっしゃいましたら、事務局まで FAX にお知らせください。

## 支部会設置を計画しております

春に開催された理事会において、東京以外の地域に支部会を組織化していくための準備委員会を設けることが決定しました。現在、支部会設置準備委員会長の沖吉理事を中心に、支部会の役割・機能及び活動内容について検討を進めております。あくまで現段階での見解としてではありますが、支部会の考え方等について、ここにご報告します。

### ◆支部会について

#### 1. 目的

- 各地域において、学芸員をはじめとした博物館関係者の交流・ネットワーク化を促進する。また、地域における会員の研究活動等を支援する。
- 各地域における会員による研究会等の活動を支援することにより、地域活動を活性化する。また、こうした活動等を通して本学会に対する理解者を図る。

## 2. 具体的な活動

- ・地域性を考慮した研究会・情報交換会の開催
- ・会報を通しての地域情報の発信
- ・大会や特別事業の企画と実施（誘致、共済）
- ・新会員の募集 等

## 3. 組織と運営

- ・九州地方、四国地方、中国地方、近畿地方、北陸地方、東海地方、関東地方、東北地方、北海道地方を目安に、地域ごとに支部会を設置する
- ・支部会は、1名の支部会長（仮称）と数名の幹事によって組織する
- ・活動支援費を事務局から支給し、研究会等の運営にあてる

なお、支部会を具体化していくにあたっては、すべてを単年度で行うということではなく、実際に活動を推進してける目処のたったところから順次行い、着実に推進していきたいと考えております。

支部会へ参画する意思のある方、是非、事務局までご連絡ください。

※本年度、地域において研究会等の活動を行いたいとの具体的な計画をお持ちの方は、事務局にご連絡ください。（可能な範囲で積極的に支援します）

# 文化施設 が活きた:No.1 水戸芸術館

Art Tower Mito

Art Tower Mito



## 公共文化施設は、 空箱であってはならない。

施設（ハード）と中味（ソフト）が同時に生きる。  
行政が特定の個人（芸術家、建築家）をサポート  
し、そこに市民のサポーターが出現する。理想の  
型がここにある。 磯崎 新

監修・シリーズ総合企画／磯崎 新  
編纂／財団法人 水戸市芸術振興財団  
定価 本体1,900円(税別)



株式会社六耀社

〒160-0022 東京都新宿区新宿2-19-12 静岡銀行ビル

TEL. 03-3354-4020 FAX.03-3352-3106 <http://www.rikuyosha.co.jp/>

JMMA会報 No.14 (Vol.4 no.2)

発行日 1999年9月30日

事務局 文化環境研究所 〒108-0023 東京都港区芝浦4-6-4 TEL・FAX 03-3455-1505 (直通)